

逆統合保育の幼稚園

大蔵みどり

筑波大学附属大塚養護学校は東京都文京区の高台にあり、校庭からは信号に従って走る地下鉄丸の内線の電車や東京ドーム、後楽園遊園地の観覧車が見下ろせます。全国の知的障害児の養護学校の中でも、幼稚部を置いている学校は十ほどしかないのです、たいへん珍しい存在だと言えるでしょう。四歳児と五歳児、定員はそれぞれ五名。先生

は男女二名ずつと週二日の先生一名で指導に当たっています。広い二教室とゆったりした遊戯室、さらには体育館。大きな総合遊具のある園庭、高等部まで合わせて全校生徒八十名それに文京区ということを考えたら広々とした土の校庭などがありません。

私がこの学校に来てまず驚いたのがこの恵まれ

た環境でした。我が子が進んでいた新宿区の保育園や以前勤めていた都心部の私立幼稚園と比べたら……。こんな恵まれた環境がなぜ障害児だけに許されているのだろう。そう感じたのはやはり私だけではありませんでした。幼稚園の統合保育に三年間通ったみゆきちゃんのお母さんはこの学校のすぐ隣に住んでいて、新幹線のすべり台でも遊びたいよという娘の言葉に養護学校が普通児にも開かれていけばいいのと思っていたのだそうです。

大塚養護学校幼稚園では、平成三年度から研究の一環として健常幼児を統合する試みを実施しています。普通学級、学校、園、の中に障害幼児を統合する一般的な統合保育と区別するため「逆統合保育」と呼んでいます。統合の幼児もここを幼稚園として毎日通い、給食も食べて二時までいるのですが、学籍の問題は未解決で、研究として、

試行として、行っている状態です。統合保育希望者は口コミで集め、研究協力依頼書にサインして入っていただいています。七年度は在籍児七名に統合児が五名。内訳は近隣在住の三歳児二名、四歳児二名（二年目）、二歳児一名（在籍児の妹）でした。八年度は在籍児七名に統合児が七名、内訳は三歳児男女二名、四歳男児一名、五歳女児二名（三年目）でした。

「逆統合保育」の基本は障害児教育ですから、幼稚園では一人一人が〈同じ〉ということを前提とするのではなく〈違う〉ということを前提としています。障害児教育の世界的な流れとして、インテグレーションからインクルージョン（包



括)へという考え方の変化があります。それはどんな子どももその一人一人に個別に発達を考えていてあげること。大多数から外れている者を大多数の側に合わせようとするとか、障害児を健常児に合わせようとするのではなくそのまま輝く道を考えようとするでしょう。「逆統合保育」は〈同年齢・同能力・大集団〉の教育ではなく〈異年齢・異能力・小集団〉の教育です。三、五歳児十四名の混合しかも半数は障害児なのでタテ割り保育の幅の広いものと言えるかもしれません。ここにはいろんな子がいるのがまったく当たり前の雰囲気があります。

実際にはどんな保育が行われているかご紹介しましょう。

自由遊び

在籍児、統合児共に好むのは、トランポリン、

砂・水遊び、自転車や乗用車、ままごと、怪獣やっつけごっこ、ブランコ、アスレチック、音楽、油粘土、生き物など。統合児たちは二期後半には子ども同士の結束が強くなり、武器作りや秘密基地ごっこなどしてとびまわっています。

集まり

幼稚部の「集まり」では呼名の時に、表に顔写真とマーク、裏にひらがなで名前を書いた木製の名札を使い、音声だけでなく視覚的にも示しながらテンポ良く出席を取ったり当番を明らかにしたりしています。出席シール貼りや挨拶の言葉、部屋の移動などいつも決まった流れで進行させています。そのことはダウンや自閉の子にとってとても良いようです。「集まり」の後半は歌です。何か小道具を持って歌に合わせて踊ってみんなの周りを回るとはどの子も好きです。北風小僧の寒

太郎は笠と合羽を身に付けて、雨降りくまの子は
かわいい傘を持って。また、前に並んで楽器を鳴
らしたり、調子のいいCDをかけてダンスや体操
をするのもみんな好きです。ラジカセのスイッチ
を押すのはけんやくんの役目です。けんやくんは
先生の踊り方をまねはしません。が、音楽がかり
みんなが踊っているのを見ると嬉しくてとびはね
て喜ぶのです。彼に対して踊り方が間違っている
などとは誰も言いません。むしろ彼のひたすらう
れしそうな表情は踊りは義務感でするものじゃな
いよと教えてくれます。だから私は、今は踊りた
くない、座って見ている、という子がいてもあま
り奇異に感じません。

造形

おおむね週二回。設定保育『造形』の時間が、
あります。発達年齢一歳前後の子どもから来年入



▲幼稚部の「集まり」の場面 年に3回の公開保育の日

学の健常児まで幅広い能力差の子どもたちが楽しめるように小麦粉粘土作りや絵の具を大胆に使う活動などを工夫しています。

体育

幼稚園では従来、週二回設定保育『体育』の間があり、全身の関節を動かす体操を繰り返して行ってきました。それは運動不足や肥満になりがちな知的障害の子どもたちには特に良いことでしたが、統合児たちには簡単なことの繰返しは飽きる傾向がありました。しかし、三年目の二名は年長になって皆の模範でありたいという意識が強まったため毎回張り切ってやるようになりました。その他、体育ではみんなで大騒ぎの新聞紙や風船を使った遊び、ずっと手をつないだままでよいひらいたひらいた等のわらべうた遊び、円陣の周りを歌に合わせて走るのはなぜか好きなので走

れ走れ等の集団ゲーム、リボンひらひらが好きな子が多いので音楽かけてリボン体操などみんなが楽しめる活動を工夫しています。

特にこの子たちにはここが良かったなと思いつかぶ例をご紹介します。

じゅんや 比較的能力の高いダウン症児。統合児たちの食事中のおしゃべりを聞いてけんめい自分も同じように話をしようとしたり、統合児は統合児同士で遊ぶ傾向がやはりあるのですが、彼らその中に積極的に入っていくようしていました。二歳で入った統合のゆみちゃんの頼もしい兄貴分でした。

ゆうた 地域の園はどこも入れてくれなかったというので都外からはるばる通って来ています。障害児らしき耳慣れない症名をもらっており服薬もしており、稀には発作もあるようで、注意深く観

察すれば普通児と違う所もある。が、全く集団生活に支障がなく思い切り園生活を楽しんでる彼を普通と呼ばずしていったい何が普通なのかと憤りを感じます。

たかひろ 彼は健常児なのですが確かにちょっと変わった印象の子です。彼は曲がった事が大嫌い。物事を真剣に考える子です。前に通っていた保育園で運動が苦手だったこと等のせいで仲間外れにされていたと行って移ってきました。彼はここで自分らしくすごし、思い切り自信をつけ、運動遊びも好きになり苦手と決めこんでいた平均台にも自分から挑戦していききました。来年は地元別の幼稚園に行くことになりました。

みさえ 三歳から三年間通った彼女はなんでもよくできる子でした。むしろなんでも完璧にしようとして過剰に悩んでしまい、学芸会の前の晩は眠れないし秋のうちから入学が不安という子でし

た。ここで三年過ごしてもその性質をすっかり克服することはできなかったようですが、同年齢の子がしのぎを削る大きな集団よりも心にゆとりを持って過ごせたのではないかと思います。

この小さな集団で癒されて地域に戻っていく子たちを見ると、いじめや登校拒否などで普通の学校に適応できなくなった子どもにあちこちの養護学校が門戸を開いていったらいいのと思います。障害児という名前をつけられた子は入れない園もぜひ検討していただきたいと思います。

(文中仮名)

(筑波大学附属養護学校幼稚園部)